

中国における解放区型大学の系譜

大 塚 豊

目 次

はじめに

1. 抗大タイプの大学の系譜
 - (1) 抗大直系の軍政大学
 - (2) 新解放区生まれの軍政大学
2. 延大タイプの大学の系譜
 - (1) 新・旧解放区型大学の合併
 - (2) 新解放区の新設諸機関
3. 解放区型大学の正規化過程

おわりに

中国における解放区型大学の系譜

大塚 豊*

はじめに

中華人民共和国建国を約半年後に控えた1949年3月23日付の『東北日報』は、「北平の青年が革命に勇躍参加、華北の三大学の受験生が三万人を超過」の見出しで、華北人民革命大学、華北軍政大学および華北大学への出願者が1か月で3万人以上に達したことを報じている。これら3校は「大学」と呼ばれているとはいえ、通常の大学とは異なり、国共内戦を遂行し、解放直後の地域での各種業務に従事する共産側の幹部養成機関であった。

そうした幹部養成機関といえ、日中戦争期の共産党支配地域、いわゆる解放区には中国人民抗日軍事政治大学（略して抗日軍政大学または単に抗大）、陝北公学、魯迅芸術文学院、中国女子大学、延安大学、沢東青年幹部学校など、多くの幹部養成機関が存在し、当時の中国において高等教育の一つの拠点を形成していた。これらの旧解放区における幹部養成機関は、設置目的や開設科目から見て、大まかに2系統に分けられよう。抗大に代表される軍関係の幹部養成機関と、延安大学、魯迅芸術文学院などのような、軍事以外の各分野の専門的知識・技能を身につけた幹部の養成機関である。

日中戦争が勃発した1937年当時の抗大での履修科目は、予科（2か月）では抗日民衆運動、戦略学、ゲリラ戦争、抗日民族統一戦線、八路軍戦術、政治常識、政治工作、社会科学であり、本科（6か月）では政治経済学、社会科学、中国革命史、戦略、戦術、射撃学、地形学、建城学、技術兵種であった¹⁾。一方、一例として延安大学を挙げれば、1944年5月に出された同大学の新しい教育方針および暫定プランでは、修業年限は一般に2年ないし3年とされ、全学に共通な履修科目として辺区建設概論、中国革命史、革命人生観、時事教育が開設されることになっており、これらに加えて、例えば、行政学院の教育系では辺区教育文化概況、小学校教育、中等教育、社会教育、教材研究、現代中国教育思想研究が開設され、自然科学院の機械工学系では力学、材料力学、工程材料学、工芸学、機械原理および原材料、原動機学、建築学、電工学、工場管理が開設されることになっている²⁾。履修内容の広がりには明確な差異が認められる。前者を抗大タイプ、後者を延大タイプと便宜的に呼ぶことにしよう。

しかし、いずれのタイプであれ、修業期間が相対的に短く、教育方針として「学ぶことと用いることの一一致」「教育と解放区の各種の実際活動とを結び付け、抗戦および解放区の政治、経済、文化建設に奉仕すること」などが強調されたのであった。さらに、それらで学ぶ学生は授業料が無償であることは勿論、衣食住および学習に必要な一切が、しばしば現物支給の形で丸抱え的に保証されたことが大きな特徴であった。これらの機関そのもの、あるいは直接、間接にその流れをくむもの——冒頭に挙げた3校もこれに属するが——は、日中戦争期のみならず、国共内戦期や建国初期

*広島大学 大学教育研究センター助教授

まで引き続き存在し、やがて新国家の高等教育システムの形成にも重要な関わりをもつことになるのである。

そこで、小論では、日中戦争期の解放区における幹部養成機関の流れを直接、間接にくむ諸機関を解放区型大学と総称する一方、上記の3大学をはじめ全国各地に数多くあった解放区型大学の状況を類型化してたどり、こうした解放区型大学が時代の需要に合わせて変容しつつ、どのように新国家の高等教育システム形成の一役を担っていったのかを明らかにしてみたい。

1. 抗大タイプの大学の系譜

(1) 抗大直系の軍政大学

東北軍政大学 1938年10月に武漢が陥落し、戦争が長期化する兆しが見えると、抗日軍政大学は抗日戦遂行の必要から華北の敵後方の根拠地に分校を設置することを決めた。まず第一分校が38年末に山西省の晋東南区を目指し、翌年1月に同区の長治、潞城、屯留などで授業を開始し、第二分校も晋察冀辺区の靈寿县陳庄で3月初めに授業を開始したのに続いて、各地に続々と分校が創られた。その数は12校を数え、第三分校から第十分校までの各所在地および成立時期はそれぞれ、延安(1939年7月)、安徽省渦陽県(1940年3月)、江蘇省鹽城県(1940年11月)、山西省武郷県(1940年11月)、山西省興県(1941年7月)、安徽省天長県(1941年5月)、江蘇省南通県(1942年5月)、湖北省随県(1942年2月)である。これらに加えて、1944年秋には山西省陽城に太岳分校が、45年春には河北省涉県に太行分校も開設された³⁾。これら太岳、太行の両分校は、45年10月には山西省長治に移動して合併し、晋冀魯豫軍政大学となっている⁴⁾。

こうした各地の分校の設置とともに、抗日軍政大学の総校(本部)自体も1939年には敵後方への移転を決め、延安から晋察冀辺区陳庄(1939年7月)、山西省武郷県蟠龍鎮(1940年2月)、河北省邢台県漿水鎮(1940年11月)へと移動し、ゲリラ戦を行いつつ教育を続けた。しかし、1943年には「中堅を保存し、養成して、偉大な新しい時期の到来を迎える」という方針の下、再びもとの陝西北部へ帰還し、そこで第8期生が卒業した45年8月の日中戦争終結まで運営を継続したのである⁵⁾。

日本の敗戦後しばらくすると、抗日軍政大学本部は命令を受け、今度は東北に移転して同地区で幹部を養成する任務を帯びた。来るべき国共内戦をにらんでのことである。再び移動が始まった。1946年2月には吉林省の朝鮮国境近くにある通化に進駐し、環境と任務の変化に合わせて校名は「東北軍政大学」と改称された。通化の本校の他にも北満、東満、南満の3分校が設けられた。しかし、東北軍政大学本校はそのまま通化にとどまったのではない。同年4月には、転戦する人民解放軍に従って大学も長春に移転し、さらに5月末には北安に再び移転する慌ただしさであった。当初は新入生を募集しても、7月1日に授業開始予定の第9期生は、わずか600人しか集まらなかった。しかし、文芸工作団の公演や校史展覧会などの宣伝活動を展開した結果、東北の青年の軍政大学に対する意識に変化が生じ、7、8、9月の3か月間に男女2,110人が入学を希望するようになった。彼らは先に入学していた者と学んだ後、46年12月および47年3、4月にそれぞれ卒業を迎え、4月には新たに第10期生の募集が行われたのである⁶⁾。

新入生が第9期生、第10期生というように旧抗日軍政大学での最後の卒業生である第8期生に続けて計算されたように、東北軍政大学は明らかに抗日軍政大学に連続するものと見做されていたのである。その後の東北軍政大学に関する資料で利用可能なものは多くないが、49年9月1日に学生数千人が8か月の学習を経て卒業しており、存続が確認しうる⁷⁾。

華東軍政大学 解放戦争の進展につれ、軍政大学の名称を冠し、しかも東北軍政大学ほど直接的ではないにしても、抗大とのつながりを確認しうる幹部養成機関が現れている。上述の抗大第四分校（英雄的死を遂げた彭雪楓校長にちなんで雪楓軍政大学と改称）が日中戦争後に華中野戦軍随営学校および蘇中工学を吸収して華中雪楓大学が成立し、さらに同大学が1946年冬に山東軍政幹部学校や広東から北上した東江縦隊幹部隊を吸収合併して出来上がったのが華東軍政大学であった⁸⁾。華東軍政大学は49年6月入学の学生3万人を第一期生としており、46年冬からこの49年の正式成立までの状況は未詳ながら、49年の時点で、同校には修業年限が1年半の本科と半年の予科が置かれ、本科では軍事、政治、文化、財政経済、医務などの任務に携わる幹部の養成が目指された。入学後は衣食住の全てならびに学用品が学校から支給され、学習期間が満了した成績合格者は、人民解放軍ないし地方政府での職場に配置されることになっていた⁹⁾。翌50年12月21日には、第一期の本科生および第二期の予科生9,000人余りが卒業し、「人民解放軍の陸、空、海軍部隊に配属され、祖国の国防建設に参加する」ことになったのである¹⁰⁾。

(2)新解放区生まれの軍政大学

以上の抗大との連続性を確認できる軍政大学に対して、新解放区、つまり抗日戦争期の旧解放区と区別して呼ばれる国共内戦期の解放区に新たに設けられた抗大タイプの大学もある。冒頭に挙げた華北軍政大学は、その一つなのである。

華北軍政大学 1949年2月、「北平、天津が解放され、多くの青年知識人は革命的な教育と研究を渴望している¹¹⁾」との認識の下、華北軍政大学を設け、第一期の学生6,000人を受け入れることが決定された。校長兼政治委員・葉剣英らの名前で公布された同校の学生募集要項によれば、華北軍政大学の目的は「人民解放軍の歩兵、砲兵、工兵、オートバイ兵などの軍事・政治幹部養成」となっている。修業期間は予科6か月、本科1年ないし1年半であった。予科の学習内容は、①マルクス・レーニン主義の一般理論および毛沢東思想、②社会科学、③中国革命の根本問題、④時事政策、⑤人民解放軍の基本知識、⑥戦術と技術であり、本科の学習内容は別に定めるとされている。出願資格は、①凡そ人民解放軍の事業に奉仕することを希望する優秀な青年知識人、②年齢は18歳以上28歳以下の男子、③教養程度は初級中学卒業以上の学生およびこれと同等の学力を有する者、④体格強壯で伝染病に罹っておらず、不良な嗜好を持たない者、である。試験科目は政治常識、国文、算術、口述試問、身体検査であった。合格者には入学後の宿舍、食事、制服、文房具、教材などの一切の費用が学校から支給され、卒業後には志望を参照して職場配置が責任もって行われることになっていた¹²⁾。この第一次募集では、2月28日付けで入試合格者324人、補欠合格者24人が公表されたが¹³⁾、引き続き短期間のうちに学生募集が繰り返されたらしく、例えば、3月半ばには第三次募集による合格者725人、補欠合格者34人が決まっている¹⁴⁾。

西北軍政大学 華北軍政大学より早く、1948年9月には山西省臨汾に西北軍政大学が開設されている。校長は賀龍将軍が兼任し、西北人民解放事業のために奉仕する政治、軍事、文化、芸術、財経の幹部養成が目的であった。予科と本科に分かれ、予科は高級中学卒業程度の学生300人を受け入れ、1年半の学習を終えた後、本科に進んでもよいし、望めば解放軍に参加することもできた¹⁵⁾。同校もまた抗大との直接のつながりは確認できない。但し、その性格は東北、華東の軍政大学と全く同じく、抗大をモデルとしていることは疑うべくもない。興味深いのは、同校には大学程度の学力ないし専門技能を備えた者を対象とする研究科も置くとされていたことである¹⁶⁾。

以上の東北、華東、華北、西北の各軍政大学の他にも、抗大タイプに属するものとして、豫陝鄂軍政大学¹⁷⁾、中原軍政大学¹⁸⁾、第二野戦軍軍政大学¹⁹⁾など軍政大学の名を冠するものの存在が確認しうる。

2. 延大タイプの大学の系譜

(1) 新・旧解放区型大学の合併

冒頭に挙げた3校のうち、華北大学の成り立ちを論じるには、再び旧解放区に話を戻さなければならぬ。

華北連合大学 延安の陝北公学、魯迅芸術学院（研究部および専修部の一部を除く）、工人学校、安呉堡戦時青年訓練班を合併し、華北に移して抗日幹部の養成を図るため、1939年7月に華北連合大学が成立した。中共中央はもともと中国女子大学も加える予定であったが、女子が多すぎると敵の封鎖線突破が難しいという理由から取りやめになった²⁰⁾。延安を出発した1,500人の教職員および学生は悪天候に耐え、黄河の激流や立ちはだかる峰々を越え、日本軍の攻撃をかわしながら、約1,500kmの行軍を3か月かけて成し遂げ、晋察冀解放区へ到着した。10月中旬に開学してからは、多数の犠牲者を出したゲリラ戦を行いながら学習が継続された。

華北連合大学は4部から構成されていた。陝北公学を改組した社会科学部では江隆基部長の世界革命史、何幹之副部長の中国革命運動史をはじめ、政治経済学、哲学などが講じられた。魯迅芸術学院を改組した文芸部には文学、演劇、音楽、美術の4系が置かれ、沙可夫部長の演劇概論をはじめ、文学概論、脚本、演出、演技技術、音楽概論、美術概論、木版宣伝画創作法が講じられた他、各分野の実技指導が行われた。安呉堡戦時青年訓練班を改組した青年部および工人学校を改組した工人部では青年運動、労働運動の授業が開設された。革命闘争の需要のために幹部を養成するという教育方針ないし目的は明確であり、「教育を政治の外に置き、社会生活の外に置くことは反対」され、「理論と実際との結合に注意し」、「内容を精選して簡素化し、通俗化する原則が貫徹²¹⁾」されたのである。

第一期生および第二期生の修業期間は約4か月であったが、40年3月入学の第三期生からは半年に延長されることになった。また、全学で社会発展史（マルクス・レーニン主義原理）、政治経済学、哲学、中国近代革命史を内容とする政治理論の授業が履修されることになり、やがて大衆運動、基本政策の2科目が加わり、一部のクラスでは日本語、ロシア語、英語といった外国語の授業も開

設されている。この時にはまた、解放区の小・中学校教師の養成を目指して、師範部が開設された。その後、40年10月に既存の部が学院に改編され、1941年2月には、晋察冀辺区政府管轄の幹部養成機関である抗戦建国学院を社会科学学院に合併して法政学院とした他、同辺区の大衆団体が運営していた大衆幹部学校を吸収して大衆工作部とし、さらに中学部も設けるなど、大学の規模や組織の拡張が徐々にすすんだ。

しかしながら、翌42年秋、戦況の変化で晋察冀解放区全体が食料の極端な不足や兵員の減少に直面すると、華北連合大学の縮小が決定され、教育学院のみを残して、文芸および法政の両学院は終結宣言が出された。このように、戦況の変化に応じるため、安定的発展を遂げたとは言い難い華北連合大学であったが、それでも、同校からの卒業生は日中戦争の終結までの6年間に、80クラス、8,000人余りに達したのである²²⁾。

日中戦争が終結すると、華北連合大学は張家口に入って復興に着手し、元来の文芸、法政、教育の三学院に文芸工作団を加えた新しい陣容を整えた。文芸学院には、文芸、演劇、音楽、美術、ジャーナリズムの5系、法政学院には、政治、財經の2系、そして教育学院には、国文、歴史・地理、教育の3系がそれぞれ設けられた。次いで46年6月には外国語学院が増設され、ロシア語、英語の2系が置かれた。そして、開設授業科目に明らかな多様化と正規化志向が見られる。すなわち、文芸学院の場合、共通科目の文芸講座、社会科学概論、国文（文学系は履修免除）の他、各系でも多様な科目が開設された。例えば、文学系では文学概論、近代中国文学史、創作方法、民間文学、文法と修辞、作品講読（外国および中国の作品を含む）、作文練習、文学活動が開設され、美術系では美術概論、色彩学、解剖学、デッサン、創作実習、屋外写生、画家研究（外国および中国）、作品研究（内外の著名な作品）、民間美術研究が開設された。これらの専門科目と政治教育科目との比率は8対2であり、授業時間が全体の66%を占め、実習その他の活動が34%を占めていたのである²³⁾。

国共内戦の勃発後、大学は戦火を避けて張家口から400キロ離れた河北省東鹿県に移転して教育を続け、さらに、47年11月には解放直後の石家庄への移転を行った。この間、46年7月には再び組織の簡素化と学習期間の短縮を余儀なくされており、教育学院の国文系は文芸学院の文学系に合併されるとともに、開設科目も大幅に削減された。他方、土地改革の実践への参加や農村小学校教育、社会教育、教育行政についての実習や研究の実施のように、実践的側面が強調されたのが、この時期の特徴であった。

北方大学 一方、1945年12月15日に、晋冀魯豫辺区政府は河北省邢台に新しい大学の設置を決めた。設立の趣旨は「人民に奉仕し、平和な国家建設に従事する各種専門人材の養成」であり、「思想信仰の自由、学術研究の自由、卒業後の職業選択の自由を認める²⁴⁾」ことになっていた。当初、新華大学と命名され、やがて北方大学と改称された新大学には財經、行政、教育、工学、医学の5学院がまず設置され、引き続き文学院、農学院および研究院（大学院）が開設されることになっていた。このうち、「研究院は戦前の大学の研究院であり、卒業時には碩士学位を授与する²⁵⁾」とあるように、本格的な大学構築の意図が看取しうる。研究院の入学資格は大学ないし専門学校卒業であった。

しかし、この北方大学も国共内戦の戦況の変化に伴って何度かの移転を余儀なくされており、例

えば、工学院の場合を見れば、河北省邢台（46年5月）、山西省潞城の張庄（46年11月）、長治（47年2月）、潞城の李村（47年4月）、潞城の故漳（11月）、邢台（48年3、4月）、河北省井陘（8月）と、2年余りのうちに6回も所在地が変わっている。この間にはカリキュラムにも変化が見られ、創設当初の本科の修業年限を予科修了後の3年間とするようなものから、47年6月頃の子科40週の後に24週にわたって専門の学習を行うことで卒業とする「突撃計画」に基づくものなど、5回も変更が行われたのである²⁶。このように、戦時下の状況は北方大学が短期訓練班的な機関から本格的な大学となることを必ずしも許さなかったとはいえ、48年5月に上記の華北連合大学との合併により華北大学となるまでに、北方大学からは1,000名余りの卒業生が生まれたのである。

華北大学 1948年5月、晋察冀解放区と晋冀魯豫解放区との合併による華北解放区の成立にともない、各々の解放区に属していた華北連合大学と北方大学は合併し、華北大学として再出発することになった²⁷。いわば、旧解放区生まれの華北連合大学と新解放区の北方大学との結合の産物であった。その任務と教育方針は、「蒋介石統治区の大学生および中学生を吸収し、毛沢東思想を学習させ、彼らを新中国の各方面の革命および建設の幹部に育てる²⁸」ことである。呉玉章が校長、成仿吾（華北連合大学長）と范文瀾（北方大学長）の二人が副校長に就任した。全校には以下の4部、2学院が置かれることになった。

第一部は政治訓練班的性格であり、学習期間は3か月～6か月であった。第二部は中等学校の教師およびその他の教育幹部の養成を任務とした。国文、歴史・地理、教育、社会科学、外国語、数学・物理・化学の6系を置き、学習期間は、外国語系が暫定的に2年間、その他の各系は暫定的に半年と決まった。第三部は労働者・農民・兵士に奉仕する文芸幹部の養成を目的とした。第四部は研究部であり、特定の専門的問題の研究および大学教師の質の向上を目的として、①中国歴史、②哲学、③中国語文、④国際法、⑤外国語、⑥政治、⑦教育、⑧文芸の8研究室が置かれた²⁹。

二つの学院とは、農学院と工学院である。まず、工学院は、華北連合大学と北方大学の合併に際して、晋察冀解放区の工業学校も含んだ合併をという同区工業局長の考えに基づいて生まれたものであるが、この晋察冀工業学校もその起源は延安大学まで遡ることができる。すなわち、1945年末、中共中央の決定に従って東北への移転の途上、山海関、承德を占領した国民党軍に行く手をはばまれたため、華北に留まって晋察冀辺区工業局の管理下に入った延安大学、とくにもとの延安自然学院が合併改組された部分が、その後の移動や合併を経て工業学校となっていたのである³⁰。こうして設置された華北大学工学院には、電機、化学工学の2系が置かれ、高級中学卒業で成績優秀な者および大学で理工学を1年以上学習したことのある者を受け入れた。授業では内容を精選し、簡素化して、何か一つの工業技術を習得させることに力点が置かれた。同時に、企業との連携により学生は必ず工場で実習を行い、技術を実地に学ぶ一方、労働者に接近することで思想の改造を図ることが目指された³¹。建国後にソ連をモデルに導入されたと従来考えられてきた方法との類似性を見いだせる。学習期限は暫定的に2年とされ、入学後に補償教育を行う先修班、入学前に補償教育を行う予備班を付設し、程度の劣った学生に対しては、一定期間の補習を受けさせた後、大学部に進学させることも行われた。

一方の農学院は北方大学農学院を前身とする。合併当時、北方大学農学院は遠く太行山中に置か

れており、合併と華北大学農学院への改称の通知も4か月遅れの48年11月になってようやく受け取る状態であった。しかし、合併後は石家荘に移転し、さらに49年5月以降、北平への移動を開始するのである。農学院には経済植物系、牧畜・獣医系、糖業系（砂糖大根の栽培および製糖を主とし、砂糖工場を付設）の3系が置かれ、修業年限は3～4年であった³²⁾。この他、全学院的事業推進の中心となる研究室や、農村に赴いて農民に奉仕することを目的とする農村教育工作隊も組織されていた。ちなみに、研究室の一つである農業生物科学研究室では、楽天宇学院長の積極的指導の下に毎週のように学術討論会が開かれ、そこでの討論の主要な内容は、メンデルやモルガンの遺伝の法則を「誤ったもの」「反動的なもの」として批判し、ミチューリン学説を学習することであった³³⁾。学術面でソ連の影響がすでに及んでいる具体的事例であろう。

さて、冒頭に述べたとおり、新たに解放された華北区において、華北大学は華北軍政大学や華北人民革命大学とともに49年2月に学生募集を開始した。まず第一部および第二部だけで募集して、3月半ばには約1,000人の学生で開学し³⁴⁾、4月22日には学生約700人を受け入れた第三部も開かれている³⁵⁾。その後も引き続き何度か学生募集が行われており、49年7月の時点での在籍者は、第一部の学生約1万3,000人（うち北平の本校4,000人、石家省庄付近の正定分校4,000人、天津分校2,000人）および第二部の約2,000人、第三部の約1,000人に達した³⁶⁾。

2月に公布された募集要項を見ると、学歴や年齢の要件は、第一部が大学卒業・中退ないし高級中学卒で、18歳以上30歳以下の者、第二部が大学卒業あるいは中学教員やその他の教育活動に3年以上携わったことがある者で、20歳以上45歳以下の者であり、第三部は第一部と同資格の者か、芸術活動に2年以上携わった者である³⁷⁾。ところが3月半ばに出された募集要項では、第一部に関しては、学歴要件が「初級中学卒業以上」に下げられている³⁸⁾。これは、中共中央が49年3月9日に出した華北局および北平・天津市委員会に対する指示の中で、華北大学、人民革命大学、軍政大学に応募する者がきわめて多いのに、建物や経費不足を口実に入学を拒否していることは「完全に誤りである」とし、上記の大学に応募する学生は「初級中学以上の教養レベルでありさえすれば、一律に受け入れ、拒絶してはならない³⁹⁾」と命じたことが深く関わっていると思われる。

彼ら入学者は大学生、中学生、大学や中学の教師、店員、労働者、商売人、軍人、技師と多様であり、従来のように敵の封鎖網をかいくぐって旧解放区の大学に入学した者と違って、思想的にも多様であった。学生や就学機会を失った者たちの多くは大学に入るために華北大学へやって来たのであり、公務員や教員、商売人などは当面の暮らしを立て、将来の進路のために華北大学で「箔をつけよう」としたのであり、さらには過去の反動的な汚点を清算するためや、恋人を追いかけてきた者、加えて、華北大学の破壊をもくろんで来た者など、さまざまな動機で入学した者が含まれていた⁴⁰⁾。その後、7月31日には第一部の5,000人余りが卒業し⁴¹⁾、9月11日には第二部の2,200人も政治学習を終えて、1,100人余りが教育活動に従事することになり、800人が大学に残って学習を継続し、200人は転学ないし教育以外の職に就くことになったという⁴²⁾。名目はどうあれ、この時期の華北大学の第一部や第二部の実態は短期速成的な政治教育の場であったと見ることができる。

これに対して、農学院と工学院は、同じ華北大学の一部といっても、上記の第一部や第二部とは一緒に学生募集を行わず、しかも、募集定員の少なさや学歴要件の高さなどから、その性格には明

らかに違いがある。49年8月に本科生150人を募集した農学院の場合、応募者の学歴要件は高級中学卒業であり、修業年限は3年～4年であった⁴³⁾。工学院の場合、49年の10、11月に冶金専修班の学生をそれぞれ38人、80人受け入れた他、新設したロシア語専修科にも80人余りを入学させているが、本格的な学生募集は50年になってからであった。50年夏に募集された620人の本科新入生の応募要件は、高級中学卒業ないし高級職業学校や師範学校卒業生で卒業後2年以上勤務した27歳以下（但し、3年以上の勤務経験のある労働者や革命家、少数民族出身者、華僑学生は35歳以下まで猶予）であり、修業年限は4年～5年と定められたのである⁴⁴⁾。同じ頃には、北京大学、清華大学といった普通の大学の学生募集も行われたのであるが、華北大学がそれらと同列に扱われることはなかった。加えて、華北大学への入学者は、農学院であれ、工学院であれ、衣食住をはじめ必要経費は丸抱えであった。この点では、農学院や工学院もやはり解放区型大学であった。

西北人民革命大学 上述したように、大部分が華北・東北へ移転した延安大学であったが、行政学院の一部などは延安に留まり、その後も運営が続けられていた。そして、1948年夏には西北の戦況の好転に伴い、陝西省洛川に延安大学分校が創られ、さらに49年7月には延安の本校とこの分校とが西安に移され、改組されて西北人民革命大学が成立したのである⁴⁵⁾。従って、この西北人民革命大学も旧解放区にその起源を求めることができる。しかし、開学したといっても正式の校舎さえなく、紡績工場や付近の住宅の一部に借り住まいの状態できりあえず授業が始まった。建物は窓が少なく、あちこち壊れており、教職員と学生はまずその修理から始めなければならなかった。ほどなく西安近郊の永楽店と通遠坊に移転し、梱包工場の建物を校舎にすることになったが、これもやはり相当の修理を要する代物であった。しかし、教職員と学生は、文字どおり「自力更生」の精神で校舎の修理、運動場の整備、周囲の塀作りなどを行い、学習の環境を創り上げ、同時に、放課後の農作業では食料とするための野菜栽培も行われた。但し、開校後2年以上も経った52年の時点でも、依然として教室の屋根は葦を編んだものが使われていたため、雨漏りがひどく、また、机もない状態が続いている⁴⁶⁾。入学してくる学生は、51年夏の学生募集規定によれば、「初級中学卒業以上の学力を有する18歳から35歳までの男女」であった⁴⁷⁾。

華東大学 1948年4月、中共中央華東局は華東に新しい解放区を開く必要性に鑑み、「臨沂の山東大学や華中建設大学を運営した経験を発揚し、（山東省北部の）濰坊市に新しく大学を設置⁴⁸⁾」することを決定した。山東大学というのは1946年1月に創られていた、やはり幹部養成機関であり、華中建設大学はもともと1945年4月に現在の安徽省の一部に当たる淮南解放区に創られ（この意味で、その起源はかろうじて旧解放区に遡るといえるのである）、後に江蘇省淮陰に移されたもので、両校は1946年3月に、後者が前者に吸収される形で合併している⁴⁹⁾。

大学の名称については、全国解放後に次第に正規化の道を進むことも考慮し、「革命」「軍政」「幹部」などの名称を冠することなく、単に華東大学とされた⁵⁰⁾。6月初め、山東の『大衆日報』に掲載された学生募集広告では、予科部および臨時研究班を置くこと記された。前者は高級中学在学経験者や中学卒業生を受け入れ、修業年限は暫定的に1年であり、後者は高級中学卒業生および大学在学経験者を受け入れ、修業年限は2～3年であった。入学後には学生に必要な物資を現物で支給する「供給制」が採用された⁵¹⁾。

7月中旬に国語、数学、歴史・地理、政治常識の入学試験を実施した結果、第一期生として500人余りが入学許可され、政治経済、文学芸術、教育の3つの臨時研究班（学生数は合計50人余り）と、高級中学以下の程度の者からなる2つの予科部が作られた。履修科目の中では中国近代史が主要なものであり、このために猛暑の中を劉雪葦教務長と数名の教師が『中国近代史講授提要』（上下2冊）を書き上げている。この書物はその後、解放区における大学・中学の歴史教材となった。

やがて華東大学も省都・済南の解放に伴い、48年11月下旬に教師・学生が全員済南へ移動している。大学の組織はこれを機に改組され、文学、社会科学、教育の3学院と1つの研究部、加えて、社会教育施設的性格の講習班と中学教師の訓練を行う教師訓練班および附属中学をもつことになった⁵²⁾。49年初めに開設されていた科目には、マルクス・レーニン主義の基礎理論、新民主主義論、社会発展史、中国近代史、時事政策が共通の必修科目としてあり、この他に、政治経済学、弁証法的唯物論、ソ連共産党史、中国文学史、教育概論、文芸政策などの専門科目が開設されていた。この頃、山東省教育学院が華東大学に合併され、教育学院の一部となっている⁵³⁾。

ところで、華東大学の修業年限は上述のとおり2～3年となっていたが、実際にはごくわずかの期間学んだ後、革命工作に従事していく者が多かった。48年12月には、濰坊で入学した学生のうちから30数人が各種の職場に配置されている。入学後わずか数か月の学習である。その後も、「南下工作隊」や「南下文芸工作隊」に志願し、49年初めに解放軍とともに南下する者が多かった。こうして初期の学生の多数が抜けた後には、徐州、南京、上海で募集した新入生や、河南大学、安徽大学といった通常の大学から山東へ移ってきた学生200人余りが入学するというように、新しい学生が相次いで補充されたのである⁵⁴⁾。

大学が教育の質的向上に力を入れたのは49年5月頃からであった。「教学小組」というものを設け、各授業科目の目的、内容、授業時数など具体的計画を共同で策定する他、個々の授業に先立って講義の重点、教え方の検討が行われた。これは、建国後にソ連をモデルに導入されたと従来いわれてきた「教学研究組」の機能に相通じるものとして興味深い。この時期には、開設科目の増加も見られ、教育学院では教育概論、教育行政、教育方法、解放区のエド育政策、文学院では中国文学史、文芸理論、文芸政策、作品選読など、それまで開設されていなかった専門科目が置かれることになった。正規化へ向かっての動きであり、この動きは49年10月の建国後にいっそう加速化されることになった。

(2)新解放区の新設諸機関

華北大学、華東大学、西北人民革命大学の成立過程をたどると、ほぼ延安時代ないし旧解放区まで直接的に連なる前身を見いだせる。これに対して、国共内戦期に各地の新解放区に次々と新設された延大タイプの大学もある。

東北行政学院 東北根拠地の幹部確保の課題を達成するため、国共内戦勃発の数か月後の46年10月、哈爾濱に東北行政学院が設置された。入試を経て入学した第一期生33人の大多数は哈爾濱および周辺の中業卒業生であったが、解放軍部隊ないし行政機関から派遣された者も一部含まれていた。学院での教育内容には、「共産党と国民党、ソ連と米国の違いを認識し、国内外の情勢に対する認

識を高め、党の方針や政策の学習を強化する」内容が選ばれた。また、学生は理論学習のみならず、例えば、1947年1月に中共中央が土地改革問題に関する指示を出すと、これに基づいて合江省依蘭県で土匪の壊滅と土地の再配分工作に4か月間従事している。47年6月には、第一期生が卒業し、10月には第二期生の授業が始まっており、修業期間は約半年であったことが分かる。第二期生は48年1月から5月まで土地改革の実践に従事している⁵⁵⁾。

1948年5月、東北行政学院は哈爾濱に従来からあった哈爾濱大学（「満州国」時代には玉道書院と呼ばれた私立大学で、46年9月に東北行政委員会によって接收され、公立に移管）を合併し、東北科学院と改称している。これを機に、理工系、教育系、行政系、公安系の4系と文芸工作団および自然科学研究所が置かれた。哈爾濱大学は文学芸術、社会科学、自然科学の3学院を置き、修業年限4年の大学であったが、興味深いことには、東北行政学院との合併後、従来の普通の大学としての性格を失い、正規の大学の解放区型大学化が見られるのである。そして、東北科学院の大多数の学生は3か月の政策教育を受けると、専門教育を受けることなく、公安、司法、工業、農業、衛生、教育といった行政部門に配属されていった。

1948年11月に瀋陽の解放に伴い、東北科学院は哈爾濱から瀋陽に移り、東北行政学院の校名を復活させた。同年12月には、行政、教育、司法の3系と師範部を置き、第四期生1,007人を迎えて開学している。彼らの大多数は瀋陽解放後に勉学の機会を失った師範専科学校の学生であったり、失業した青年知識人であった。彼らに対する教育は、第一学期の4か月間を使って行われる新民主主義論、中国近代史、社会発展史、思想修養講座といった政治教育から始まったが、この時期は依然として短期訓練班的性格が強かった⁵⁶⁾。

中原大学 1948年6月22日、河南省の省都である開封の解放にともない、多くの学生、教師、勤労青年が解放区に流入し、彼らの就学、就職の斡旋を行うことが重要な課題となった。このため、豫西解放区の寶豊県に臨時本部が設けられたのが中原大学である。

他の新解放区生まれの解放区型大学と同様、中原大学の創設もまさに「無から有を生む」が如きものであり、スタッフ、経験、設備のいずれも欠けていたが、とくに学校創設直後には、数名のもと河南大学教授以外には教員はおらず、政治の授業は中共中央中原局の責任者たちが時間を割いて政治報告を行うことで代替していた。そうした状況の下、7月から8月にかけて、華北、華東のすでに解放された地区から南下した幹部、とりわけ既存の解放区型大学の関係者が中原大学に配属になったことが、大学の運営を軌道に乗せる上で大きな役割を果たしたことは見逃せない。8月下旬には北方大学で教務長の職にあった張柏園が配属になり、教務長に就任している。その後も、既存の解放区型大学からの人的支援は続き、例えば、10月には華北大学から職員22人が中原大学へ配属されており、その後暫くして再び華北大学の文芸研究室から14人が到着している⁵⁷⁾。

但し、既存の解放区型大学で正規化がすすんでいたのとは対照的に、新設の中原大学では、教育計画策定に当たって、責任者の一人である劉子久が「中原大学は短期訓練班的性格をもつ大学であり、新解放区の知識青年の思想を改造する任務を担っている⁵⁸⁾」と述べ、これが基本方針となった。その結果、開設科目は、①社会科学の基本知識（とくに労働による世界の創造、社会発展史、階級と国家、政党と革命の諸点を重視）、②現代中国革命運動史（第一次国内革命戦争から講じる）、③

新民主主義の基本政策，④青年の修養，に決まった。

中原大学では、授業と並行して次期の学生募集が積極的に行われた。当初、学生募集は土地の反動派や土匪の直接、間接の妨害に遭い、「学生募集と称して巧妙に兵隊を集めている」といった噂が流され、募集活動に積極的に協力した入学希望の青年が暗殺される事態すら起こった。9月後半の半月で募集に応じた者はわずか70人であった。しかし、国共内戦が共産側に有利に展開するにつれ、勞せずして学生が集まるようになっていった。10月の応募数は482人であり、11月には1,414人が集まったのである。その後も、新入生の募集は続き、49年1月から4月までに合計3,195人が入学した。一方、11月下旬に学生186人が第一期卒業生として中原大学から巣立ったのを皮切りに、続々と革命活動に従事する若い世代が送り出され、その多くは解放軍に参加したのである。この間、48年11月末には開封への大学の移転が始まり、開封では河南大学の校舎を借用することになった。さらに49年8月初めには、全学が5月16日に解放された武漢への再移動を行ったのである⁵⁹⁾。

華北人民革命大学 全国の解放が視野に入ってきた1949年2月、さらに大量の革命幹部および各種人材が差し迫って必要となったことから、中共中央華北局は冒頭に述べた華北人民革命大学を北平の西の郊外にある萬壽山のそばに創設した。

第一期の募集定員は1万人であり、修業期間は暫時4か月と定められた(その後、6か月に延長)。出願資格は「凡そ中国人民の事業に奉仕することを願う大学生、中学生および一般の知識人、完全小学校卒業以上の学力を有する公務員と教職員、その他の革命家は、男女を問わず、年齢が18歳以上40歳以下で、健康であれば、誰でも出願することができる⁶⁰⁾」というものであった。上記の華北大学に比べ、いっそう緩やかな条件である。選抜は政治常識、国語、中外地理、数学の各試験と口述試問、身体検査により行われた。入学後の待遇は、「一切の食事、宿舎、制服、文房具、教材の費用を本校が支給する」というものであり、卒業後には、大学の紹介で適当な革命工作に配置されることになっていた。

大学の組織は第一部から第四部までの本校と天津分校から成っていた。各部は9～10班構成で、各班の学生は250人前後からなり、各班はさらに幾つかのグループとその下の学習互助組に分かれていた。こうした下部組織は華北大学、東北行政学院、華東大学のように内容を示す農学院、文学院、教育学院といった専門分化した具体的名称をもたず、その点で華北人民革命大学は政治訓練班の性格が強く、中原大学により近かったといえよう。学習内容は政治・思想に関わるもので、上記の各大学と大差はないが、時には、朱徳総司令、薄一波、黄敬、安子文、楊献珍といった主要な党幹部が大学を訪れ、講義を行っている。校舎は国民党青年軍208師団が使っていた荒れ果てた施設であったが、学生および北平建設労働者連合会の協力で修理、清掃が行われ、どうにか使用に堪えるものになったという⁶¹⁾。

49年6月の時点で、学生数は1万2,000人余りであり、このうち3,000人余りは天津分校の所属であった。入学前の身分に関しては、学生であった者が多数を占め、次いで工場や政府機関職員・学校教師などが多く、その他として商人、旧軍人、失業労働者なども一部含まれていた。女子学生は全体の5分の1を占めていた。入学した学生の動機がさまざまなのは華北大学の場合と同じであった。講義、討論、質疑応答の3つの方法で教育が行われた。講義は、幾つかの部が集まって行われ

る大規模の講義と2～3の班が集まって行われる小規模の講義とに分かれ、前者が主であり、後者は補助的に行われた。討論は少人数のグループ討論を行った後にクラス全体の討論を行うという方法がとられた⁶²⁾。

華東人民革命大学 解放軍が揚子江を渡り、上海解放も時間の問題となっていた1949年5月上旬、中共中央華東局は丹陽付近の新豊鎮に華東人民革命大学を創設することを決定した。校長には、中共華東局の舒同宣伝部長が就任し、華東局の党学校幹部82人、渤海区から南下した党、軍、政府関係機関の幹部1,019人、上記の華東大学の卒業生169人、さらに中共上海市委員会の地下党員5人など、計1,280人が教職員として配置された。

これらの人々は解放直後に上海に入り、暨南、復旦、光華の各大学および復興中学の校舎を借り、学生の募集を行った。この時の募集要項を見ると、次のような内容になっている⁶³⁾。大学の目的は「新民主主義建設が必要とする各種（政治、経済、文化などの方面の）幹部を養成すること」であり、出願資格には、「高級中学程度以上、あるいはそれと同等の学力を有する者」「年齢は一般に18歳以上35歳以下」といった条件が見られる。第一期の定員は暫定的に5,000名とされた。入試科目は国語、数学、社会科学常識、自然科学常識、口述試験、身体検査である。予科（3か月）と本科（半年）とが設けられ、「一般に高級中学卒業から大学第1年次あるいはこれと同等程度の者は予科へ入学し、大学在学1年以上あるいは相当の政治・教養レベルを身につけている者は本科へ入学する」とされている。同じ人民革命大学でも、華北よりも学歴要件が厳格である。入学後、予科では、必修科目として、教育方針、改造学習、革命の人生観、知識人問題、社会発展史、中国革命の基本問題、新民主主義の政策、大衆の観点と大衆路線が開設され、本科では、以上の科目の他に、マルクス・レーニン主義哲学、政治経済学が加わることになっている。試験に合格して入学した者は、「布団、蚊帳および日用品を自ら準備する以外、一切の衣食住、学習用品を支給」されることになっていた。

募集に応じて応募した者は、わずか半月で6,100人にのぼった。結局、第一期生として入学したのは4,082人であったが、このうちの1,296人は、上海の学生連合会が推薦してきた各大学の理、工、医、農学分野の卒業生であった。こうした入学者の一人で、大学では自然科学を学んだ学生は、やむに止まれぬ思いで入学はしたものの、人民革命大学に来てみて、その設備の貧弱さ、幹部の教養水準の低さに驚き、食事も不満で、与えられた数冊の本も、能力を見くびられたとしか思えなかった。校舎からして借り物であり、図書や設備を欠き、学習参考書として配布されたのは、『われわれの学習を改造しよう』『知識分子と教育問題』『社会発展略史』『共産主義の人生観』『中国革命の基本問題』『自己批判を論ず』『中国の労働者運動と当面の任務』『農業建設の問題』『工業・商業政策を論ず』といった十数冊のパンフレットであったからである⁶⁴⁾。これは、その後の学習を通じて考え方が改まり、革命工作に従事した者の例として挙げられているものであるが、大学が置かれていた劣悪な条件を窺うことができる。彼らはしかも、予め学習期間として定められた本科で6か月、予科で3か月にわたって在学したのでもなかった。すなわち、国共内戦の展開は急速であり、速やかに大量の幹部要員を必要としたことから、わずか40～50日学んだ後、9月末にはすでに学習を修了したものとして、各部署へ配属になったのである。なお、校舎については、毛沢東が関心を寄せ

て自ら指示を出したこともあって、49年の夏休み以後、蘇州にあった華東軍政大学を南京に移し、その跡に華東人民革命大学が入ることになった。

その後、50年2月には第二期生の募集が行われ、5,705人が入学している。この第二期の学生募集時の要項を見ると、前回に比べ、応募資格に関して、「年齢が18歳以上28歳以下」と低くなっている点、「女性で妊娠している者および子連れのは受け入れない」となった点、さらに出願料として1,000元が徴収されることになった点が異なっている⁶⁵⁾。第一期生を緩やかな基準で入学させたことで生じた不都合への反省に立っての変更と考えられる。以後、52年末に当面の使命を果たし終えたとして、華東人民革命大学としての終結宣言が出されるまで、第三期5,283人(51年1、2月)、第四期1,308人(51年9月)、第五期約1,000人(52年6月)の新入生がそれぞれ受け入れられたのである。

南方大学 華北、華東の人民革命大学に続いて、上述した西北人民革命大学(49年7月創設)の他、湖北(49年7月)、湖南(49年9月)、広西(49年12月)、西南(50年4月)などの各地区・省にも人民革命大学が創られていった。人民革命大学は1949年以降に現れるものであり、それ以前のは上記の各大学のように「人民革命」を冠してはいない。だからといって49年以降の解放区型大学が全て人民革命大学と呼ばれたのでもない。例えば、49年10月には南方大学が開設されている。

南方大学は49年12月に第一期生の募集を行っているが、募集された定員3,500人の学生の学歴要件は「高級中学卒業以上から大学卒業まで」であり、年齢が「20歳以上32歳以下」であった⁶⁶⁾。国語、政治常識、中外歴史・地理、数学からなる筆記試験と口述試験および身体検査を経て入学した募集定員を上回る4,073人に対して、50年1月から授業が実施された。開設科目は上述の解放区型大学と大同小異であるが、毛沢東思想、愛国主義と国際主義などが目新しい。7か月間(募集要項では半年となっていた)の修業期間を終えて卒業を迎えたのは3,988人(一部は途中で仕事に就いた)であり、彼らの90%以上が決められた職場への配置に従ったという⁶⁷⁾。引き続き行われた第二期生の募集では、出願する年齢制限が「25歳以上30歳以下」と狭まったのを除き、他の条件は前回と同じであった⁶⁸⁾。

1952年10月に全国の大学再編成に伴い、その終結が宣言されるまで、南方大学からは結局1万8,230人の卒業生が生まれている。彼らの進路を見ると、広東の土地改革に従事した者4,396人、参軍した者2,572人、財政・経済関係の行政業務に就いた者1,996人、文教の業務に携わった者911人、広東省や広州市の労働組合業務に就いた者1,168人、中共中央華南分局や広東省や広州市の各種行政機関・団体に配属された者4,109人、広東・広西両省の各地方に勤務した者3,013人、華南以外の地区に配置された者65人となっている⁶⁹⁾。

3. 解放区型大学の正規化過程

以上述べてきた各解放区型大学の類型を表にすると、次のようになろう。

第1表 解放区型大学の4類型

<p>I 旧解放区起源の抗大タイプ (例) 抗大→東北軍政大学 抗大分校→華東軍政大学</p>	<p>II 新解放区起源の抗大タイプ (例) 西北, 華北の軍政大学</p>
<p>III 旧解放区起源の延大タイプ (例) 華北連合大学 延安大学 → 華北大学 北方大学 → 華北大学 延安大学 → 西北人民革命大学 華中建設大学 → 華東大学 山東大学 → 華東大学</p>	<p>IV 新解放区起源の延大タイプ (例) 東北行政学院, 中原大学, 南方大学および華北・華東・湖北・湖南・広西・西南の各人民革命大学</p>

このように分類しうる各解放区型大学のうち、その本流というべきは、やはり旧解放区以来の軍政大学、ならびに最終的に華北大学となっていく非軍事系幹部養成機関の流れなど、つまり表の左半分であろう。これに対して表の右半分の諸機関は、モデルは同一とはいえ、系譜を描けば旧解放区の諸大学との間を実線で結べないものである。なお、分析の便宜上、人民革命大学などを非軍事系幹部養成機関と性格規定し、延大タイプとして軍政大学と区別したけれども、解放戦争中の両者の区別はそれほど明確ではない。というのも、軍政大学というのは砲兵学校とか歩兵学校のような軍事技術を習得する学校ではなく——確かに、そういう側面も含まれていたが、純然たる軍事技術学校は別途存在していたこともあり——、むしろ軍隊内で政治工作といった分野に携わる幹部の養成を目指していたのであり、また、解放した地域での軍事以外の各種業務、例えば、土地工作、教育、財政の専門的知識を備えた幹部を軍の内部でも養成する必要があったからである。この意味では、延大タイプと考えたものとの共通性が認められる。実際、上述したように、華東軍政大学は文化、芸術、財経などの専門人材の養成を目的の一つに掲げていたことを想起すべきであろう。

同時に、当時の最優先目標は解放戦争に勝利することであり、そのために華北大学にせよ、人民革命大学にせよ、卒業生の多くが実際のところ人民解放軍に参軍しているのである。49年2月17日に中共中央が東北野戦軍総敵前作戦委員会と共産党華北局に当たった電報では、南下予定の東北野戦軍が北平で1万人の参軍志願学生を集める必要があるため、華北大学、華北軍政大学、華北人民革命大学の学生募集とかち合わないよう配慮すべきこと、および華北大学ですでに訓練を受けた300人の学生を東北野戦軍に配属して、新たに募る1万人の中堅とすべきことが指示されている⁷⁰⁾。華北大学も学生募集要項に掲げた目的どおりではない、本来なら軍政大学が担うべき機能を果たしていたのである。

しかしながら、建国後には軍政大学とそれ以外との差は明確になっていく。その典型的成り行き

は、1950年10月、毛沢東が華北軍政大学と華東軍政大学を基礎として南京に軍事学院を創設することを認可した事実に見られよう⁷¹⁾。このように、軍政大学の中からは建国後しばらくして本格的な軍事教育機関に再編される道をたどるものが現れたのであり、今日、教育行政当局の統計に表れることは少ないが、確固たる高等教育の1部門を構成している軍事高等教育機関へとつながっていくのである。

延大タイプの解放区型大学についても、建国初期に、その一部が所期の目的を果たした段階で廃止される一方、徐々に正規化の道を進み始めるものが出てくる。しかし、抗大タイプと異なり、こちらの方は通常の全日制大学へと変容ないし移行するものが多かったのである。その典型的な例の一つは東北行政学院である。すなわち、同学院の短期訓練班的性格は、1949年8月1日に中共中央東北局と東北行政委員会が「高等教育の整頓に関する決定」を公布してから変化し始め、49年後期には修業年限もクラスにより1年半、2年半、2年に延長されている。そして、50年3月31日に東北人民大学と改称（58年に吉林省に移管され、吉林大学と再度、改称）された後は、全く普通の大学に生まれ変わるのである。

同様に人民革命大学から人民大学へと変わったのは西南人民革命大学であった。50年4月という遅い時期に、劉伯承、鄧小平らの指導で設置された西南人民革命大学は、本校が重慶に置かれた他、南充、成都、瀘州、西康、昆明、貴陽の各地に分校をもち、他地区の同種の機関と同じように、四川省、貴州省、雲南省など西南地区の革命幹部の短期養成を行っていた。しかし、52年4月以降、財政、経済計画、工場管理、貿易、ロシア語、政法、政治教育の7系、ならびに財政、会計・統計、工程管理班、司法幹部訓練班の各短期専修科を置く西南人民大学として正規化する方向が模索されたのである。但し、上記の東北人民大学がそのまま全体として正規化を続け、やがて通常の全日制大学となったのに対して、西南人民革命大学から人民大学への改組はすでに完了し、実際に教育が行われていたにも拘らず、最終的に中央政府の政務院の承認は得られなかった⁷²⁾。そして、53年9月の正式な終結宣言までの1年余りの間に、各系がそれぞれ独立したり、同一分野の他の高等教育機関との合併が行われたのである。例えば、ロシア語系は分離独立して西南ロシア語専科学校（59年5月に四川外語学院）となり、政法系は西南政法学院になったのである。

前身校も含めれば起源が旧解放区にあり歴史の長い華北大学では、教育学院などで早くから普通の大学に匹敵するようなカリキュラムの充実が見られたが、とくに工学院および農学院は建国前後から入学要件として高級中学卒業の学歴が求められ、修業年限も4年前後になるなど、正規化が急速に進んでいた。かくて、49年末には華北大学としての使命を終え、華北人民革命大学とともに、同時期に決まった中国人民大学創設の基盤を形成することになった。また、同じ華北大学といっても性格に違いの見られた工学院は、51年11月には北京工業学院として通常の工学系大学に生まれ変わるものであり、農学院もまた北京の本院と石家荘分院および長治分院の合併により北京農業大学となったのである。

中原大学が正規化に向けて新しい段階に入るのは、49年5月の武漢移転後であった。武漢では、ようやく武昌中学およびその近隣の自動車修理工場の施設が払い下げられ、中学の校舎などの一部借用ではなく、不十分ながらも固有の校舎をもつに至っている。同時に、大学組織にも若干の変更

が見られ、第四部（研究部）の文芸研究室を基礎として文芸学院が設置されることになった。次いで49年冬には中南全区が解放される見通しとなり、戦時下での短期訓練班的運営によって急速に幹部要員を養成する必要は減少し、以後は一般的な幹部ではなく、特定部門での専門人材、とくに財政・経済部門の人材が必要という認識が強まった。このため、49年11月には、中共中央中原局の指示を受けて、中原大学はすでに成立している文芸学院に加えて、財經学院、教育学院を設け、さらに従来短期の政治訓練を実施してきた4つの部を政治学院に改めたのである。但し、この時期にはまだ短期訓練班に対する需要が全くなくなった訳ではない。従って、各専門分野に関する学習の期間は暫定的に半年とされ、それに先立って政治学院で政治学習を行うこととなった。

その後、正規化は徐々に進行し、修業年限も次第に延長されている。例えば、文芸学院は1950年8月には1年から2年に伸び、財經学院は50年6月には政治学院を合併吸収した後、51年8月に3年制になっている。財經学院は53年にはさらに、河南、湖南、中山、南昌、広西、武昌中華の各大学および広東法商学院の財經、政法関係の系・学科と合併し、4年制の中南財經学院、中南政法学院が成立したのである。教育学院に関しては、労働者・農民に対して速成教育を施すために設けられた労農速成中学の教員や労農幹部の文化補習学校の教員を養成するための機能を果たすことが求められたこともあって、修業年限の延長は見られず、6か月ないし5か月で研修を終えることとなったが、やがて51年8月には、私立の華中大学との合併により公立の華中大学として生まれ変わることになるのである⁷³⁾。

華東大学の場合には、49年10月中に教育学院が山東省教育庁の管轄下に置かれて独立し（やがて山東師範学院となる）、附属中学も済南市教育局の管理下に入った。これとともに、文学院、研究部、講習班、教師訓練班の学生は全員学業修了ということになって、中学教師その他の職に配置されていった。もう一つの社会科学院の学生1,000人余りについては、まず400人余りが選ばれ、大学に残って職員となった30数人を除き、軍事学校、山東省内の文教、衛生、宣伝、出版などの機関に配属されていった。残り600人余りは、そのうちの200人余りが大学をいっそう正規化する政策に沿って設置された修業年限2年間の政治、ロシア語の2つの「長期クラス」に編入されることになり、その他の300人余りはそのまま短期の政治教育を受けることになった。この政治、ロシア語の長期クラスから、華東大学はさらに50年5月には、政治、文学、歴史・地理、芸術、ロシア語の5つの系をもつものへと発展している。但し、長期クラスとはいえ、修業年限は依然として2年間であった。大学が4年の課程となるのは、50年10月の済南から青島への移転を経て、最終的には51年3月15日に山東大学との合併が実施されてからであった。華東大学としては、設立以来の2年余りの間に、約4,000人の革命幹部を社会に送り出したのである⁷⁴⁾。

以上の各校が徐々に正規化し、最終的に普通の大学の全体ないし一部に改組されたのに対して、華東人民革命大学の場合には、すでに述べたとおり、52年末に人民革命大学としての終結が宣言され、消滅した。但し、同大学には通常の学生とは質的に異なる学生を受け入れた附属学校があり、この部分のみは枝分かれして正規化の道をたどった。それは人民革命大学附属として設置された上海ロシア語学校である。日増しに高まる外事活動の必要性に応じるため、上海市人民政府は49年夏に高等外国語学校を設置し、ロシア語の人材を養成することを決定した。各種の準備活動を経て11

月に学校は正式に設置され、第一期生400人が募集され、人民革命大学第四部となったのである。50年冬には、さらに多くの種類の外国語人材を養成するため、華東人民革命大学付設外国語専修学校と改称され、ビルマ語、ベトナム語、インドネシア語からなる東方語文系が増設されて、改めて400人の新入生を入学させた。同校は53年の大学再編成の過程で上海ロシア語専科学校となり、増設された東方語文系は北京大学東語系に吸収合併されていくのである。

華東人民革命大学にはもう一つ終結宣言後も残った組織がある。政治研究院である。これは、解放前の金陵大学の陳裕光校長、復旦大学の章益校長、大夏大学の欧元懐校長といった華東区の各大学で指導的立場にあった人々や、華東区の国民党革命委員会、民主同盟、民主建国会など民主党派の関係者の思想・政治教育のために人民革命大学第六部として設けられ、後に改称されたものである。指導に当たった革命大学のほとんどの幹部は、彼らが教えるのが知識の該博な大学教授であり、自分はほんの田舎者といった気持ちが強く、当初この任務に就くことを嫌がった。それほど教えられる側が学歴や教養程度では上であった⁷⁵⁾。しかし、結果として旧社会の知識人たちは、新しい社会に生きるための基本的考え方をこの政治研究院で学び、新中国の高等教育界、学術界で新しい貢献をすることになるのである。政治研究院は前後3期にわたり900人余りの教育を行い、53年の国慶節を前に、歴史的使命を果たし終えたとして終結宣言が出されたのである。なお、建国初期には、より広範に大学教師の思想改造が行われたことはよく知られている。

同じく終結宣言が出された南方大学も、その全部ないし一部が普通の大学に改組されたり、あるいは既存の大学に合併されるということにはなかった。南方大学の管理者や教員は中山大学、華南工学院、華南農学院といった普通大学などに配置換えになる一方、キャンパスは広東文理学院、中山大学の師範学院、嶺南大学の教育系などの合併により新設された華南師範学院に与えられ、南方大学の全ての建物、施設がそのまま華南師範学院に引き続いて使用されることになった。これとともに、南方大学の管理責任者、教職員、卒業生が新設校である華南師範学院のポストの幾つかに就任したのである⁷⁶⁾。

おわりに

以上とり上げた各校は存在した解放区型大学の全てを網羅するものではなく、代表的な事例である⁷⁷⁾。しかし、それらの発展状況からは、日中戦争であれ、国共内戦であれ、戦況の変化に応じて、より大きな需要のあるところへ移転することを常態とするが如く転々と所在地を変えてきたことが、特徴として浮かび上がった。当然のことながら、自前の整備された施設をもつことは容易ではなく、多くの場合、利用しうる有り合わせの建物が何でも使われた。逆に、解放区型大学の通常の大学への移行を見分ける目安としては、固有の施設の確保が挙げられそうであり、一つの地点に定着したときから正規化が始まったとよい。それは時期的には、国共内戦での共産側の勝利が決定的になる建国前後であった。しかし、たとえ借り物の校舎であっても、戦時下あるいは戦争直後の状況下で必要とされた各種の人材を供給し得たことと同時に、それらがなければ全く学習の機会が得られなかった人々のために、高等教育、ないしこれに準じる内容の教育の空白を埋めた側面

は、解放区型大学の功績といえよう。

正規化の目安としては、修業年限の延長、カリキュラムの充実、入学資格、とりわけ学歴要件の高度化などがある。しかし、これらに関する各解放区型大学の状況は、本文で詳述したとおり、まさに千差万別であって、時期、内容ともに、何らかの一般化を行うことはほとんど不可能である。逆に、全く統一性をもたず、その時々状況に合わせて柔軟に変化してきたことこそ解放区型大学の特徴であるともいえる。

正規化の別な目安として、入学後の待遇の丸抱え方式の廃止も重要であろうが、普通の大学の場合、49年前半、すでに全員対象でなく、また個々の受給者についても部分的援助である助学金方式が導入され始めた。これに対して、解放区型大学の場合は、在学中の学習および生活に必要な経費ないし物資を全て保障する方式が、最終的に普通大学に改組されるまで一貫して続いたのである。

かくて、解放区型大学は終結宣言により完全に消滅したものを除き——その場合でも、個別の施設やスタッフは普通大学により再び活用されたが——、その全部ないし一部が普通大学に生まれ変わり、新国家の高等教育システムを構成することになった。そこで採用された卒業生の職場配置を統一的に実施する方式も、その原型をこれらの大学に見いだすことができる。しかし、新しい高等教育に解放区型大学が及ぼした影響のうち、最も大きなものは、中華人民共和国の高等教育の魂とも呼ぶべき部分、つまり、マルクス・レーニン主義ないし社会主義的思想・政治教育に関わるものであったろう。なぜならば、解放区型大学以外の既存の大学では、新国家成立以前にこの面でのノウ・ハウは全く蓄積されて来ず、一方の解放区型大学の真骨頂は、この面の教育であったからである。

【註】

- 1) 陝西師範大学教育研究所編『陝甘寧辺区教育資料・高等教育和幹部学校部分（上冊）』、教育科学出版社、1981年、2～3頁
- 2) 陝西師範大学教育研究所編『陝甘寧辺区教育資料・高等教育和幹部学校部分（下冊）』、教育科学出版社、1981年、147～148頁
- 3) 曲士培、『抗日戦争時期解放区高等教育』、北京大学出版社、1985年、63～69頁
- 4) 張騰霄主編、『中国共産党的幹部教育（抗日戦争時期）』、中国人民大学出版社、1988年、375頁
- 5) 曲士培、前掲書、60頁
- 6) 東北軍政大学吉林分校『軍政大学簡史』、1947年、24～26頁
- 7) 『人民日報』1949年9月21日
- 8) 『解放日報』1950年2月28日
- 9) 『人民日報』1950年12月29日
- 10) 『人民日報』1950年12月29日
- 11), 12) 『人民日報』1949年2月26日
- 13) 『人民日報』1949年2月28日

- 14) 『人民日報』1949年3月15日
- 15) 『人民日報』1948年9月22日
- 16) 北京師範大学教育系編『新民主主義教育大事記』, 1978年, 234頁
- 17) 皇甫束玉, 宋薦戈, 龔守靜編『中国革命根拠地教育事記』, 教育科学出版社, 1989年, 360頁
- 18) 『解放日報』1950年2月28日
- 19) 『人民日報』1949年6月5日
- 20) 成仿吾『戦火中の大学』, 人民教育出版社, 1982年, 74頁
- 21) 同上書, 98頁
- 22) 同上書, 127頁
- 23) 『人民的大学——華北聯合大学介紹』, 東北書店, 1948年, 12~16頁
- 24) 北京農業大学校史資料征集小組編『北京農業大学校史(1905-1949)』, 北京農業大学出版社, 1990年, 579頁
- 25) 同上書, 579頁
- 26) 同上書, 51頁
- 27) 『人民日報』1948年9月15日
- 28) 華北大学成立典禮籌備委员会編『華北大学成立典禮特刊』, 1948年, 28頁
- 29) 同上書, 28~29頁
- 30) 北京理工大学校史編委会編, 前掲書, 41~47頁
- 31) 『人民日報』1949年7月11日
- 32) 『人民日報』1949年7月29日
- 33) 北京農業大学校史資料征集小組編, 前掲書, 598頁
- 34) 『人民日報』1949年3月17日
- 35) 『人民日報』1949年4月25日
- 36) 『人民日報』1949年7月11日
- 37) 『人民日報』1949年2月26日
- 38) 『人民日報』1949年3月15日
- 39) 团中央青運史研究室・中央档案館編『中共中央青年運動文件選編』, 中国青年出版社, 1988年, 719頁
- 40) 『人民日報』1949年7月14日
- 41) 『人民日報』1949年8月1日
- 42) 『人民日報』1949年9月14日
- 43) 『人民日報』1949年7月29日
- 44) 『解放日報』1950年7月20日
- 45) 陝西師範大学教育研究所編, 前掲書(下冊), 212頁
- 46) 『人民日報』1952年4月17日
- 47) 『河南日報』1951年7月8日

- 48) 山東大学校史編写組編『山東大学校史（1901—1966）』, 1982年, 132頁
- 49) 熊明安『中国高等教育史』, 重慶出版社, 1988年, 570頁
- 50) 山東大学校史編写組編, 前掲書, 132頁
- 51) 同上書, 2頁
- 52), 53) 山東大学校史編写組編『山東大学校史（1901—1966）』, 山東大学出版社, 1986年, 136頁
- 54) 同上書, 137~139頁
- 55) 吉林大学校史編委会編『吉林大学史誌（1946年—1986年）』, 吉林大学出版社, 1986年, 4~6頁
- 56) 同上書, 13頁
- 57) 校刊編輯委員会編『中原大学二週年紀念專刊』, 1950年, 14頁
- 58) 同上書, 13頁
- 59) 同上書, 14~15頁
- 60) 『人民日報』1949年2月17日
- 61) 『人民日報』1949年6月23日
- 62) 『人民日報』1949年6月24日
- 63) 華東人民革命大学校史編写組編『華東人民革命大学校史』, 華東師範大学出版社, 1989年, 3~4頁
- 64) 同上書, 17頁
- 65) 『解放日報』1950年2月19日
- 66) 『南方日報』1949年12月3日
- 67) 『南方日報』1950年8月8日
- 68) 『人民日報』1950年8月19日
- 69) 南方大学校史編写組編『南方大学校史稿（1949—1952）』, 1986年, 90頁
- 70) 团中央青運史研究室・中央档案館編, 前掲書, 720頁
- 71) 皇甫東玉, 宋薦戈, 龔守静編, 前掲書, 361頁
- 72) 中国教育年鑑編輯部編『中国教育年鑑（地方教育）』, 湖南教育出版社, 1986年, 1020頁の記述ならびに西南師範大学教育科学研究所の熊明安教授の御教示による。
- 73) 陶軍編『中原大学校史』, 華中師範大学出版社, 1986年, 142~159頁
- 74) 山東大学校史編写組編, 前掲書, 1986年版, 144~147頁
- 75) 華東人民革命大学校史編写組編, 前掲書, 87頁
- 76) 南方大学校史編写組編, 前掲書, 98~99頁
- 77) 例えば, 蘇渭昌「人民革命大学的蓬勃興起及歴史功績」, 『高等教育未来與發展』1986年第2期, 11~24頁は, 小論で「新解放区起源の延大タイプ」と分類したものにほぼ相当する各機関を取り扱った論文であるが, 同論文によれば, 省および行政公署が設置したこの種の機関だけで1949年, 50年に57校存在したという。なお, 蘇渭昌氏との北京での議論を通じて, 本稿執筆上, 多くの示唆を得ることができ, また, 同氏からは貴重な資料の提供も受けた。付記して謝意を表したい。

Genealogy of the Liberated Area Type Colleges in China

Yutaka OTSUKA*

During the Sino-Japanese War, there were many institutions training various kinds of cadres in the so-called liberated areas, particularly in Yan'an. These institutions can be divided into two groups in terms of content or scope of curriculum, i.e. one represented by the Chinese People's Anti-Japanese Military and Political College (*Kang-da* in short in Chinese) and the other represented by Yan'an College (*Yan-da*). The former mainly aimed to train cadres of the People's Liberation Army and the latter aimed to train specialists of broader fields including economics, literature, art, science, technology and so on. Such institutions not only existed in that period, but continued to be run in the subsequent period of war against Kuomintang or the Nationalist regime and even in the early days of the People's Republic. Some of them were gradually adapted and involved in organizing the academic system of the new state.

This paper coins such institutions with a general term of "liberated area (LA) type colleges." This paper traces the development of some examples of LA type colleges, both *Kang-da* type and *Yan-da* type and considers how they underwent changes to meet the social demands and how some of them finally became full-time ordinary universities and colleges constituting a part of a new system of higher education. Some of these institutions were originated in the old liberated area or Sino-Japanese War period and others in the new liberated area or the Kuomintang-Communist War period. Therefore, they are classified into four categories as follows:

Category I includes Military and Political Colleges in Northeast and South China regions which were direct successors of *Kang-da*.

Category II includes Military and Political Colleges in the Northwest and North China regions, which were established in the new liberated areas.

Category III includes North China College, South China College and Northwest People's Revolutionary College, which were a blend of institutions originated in the old and new liberated areas such as *Yan-da*, North China Associated College, Beifang College or Northern College, etc.

Category IV includes Northeast Administration College, Nanfang College or Southern College, People's Revolutionary Colleges in North China, South China and Southwest regions as well as Fubei, Funan and Guangxi provinces, born in the Nationalist-Communist War period.

*Associate Professor, R. I. H. E., Hiroshima University

It is significant to see when and how the duration of study was prolonged, curriculum was enriched, and admission requirements were fortified in analyzing the process of transformation from LA type into ordinary universities and colleges. However, the situation of each institution in terms of such criteria varied so greatly, as scrutinized in this paper, that it is almost impossible to generalize the transforming process of LA type colleges. Conversely speaking, it may be possible to say that LA type colleges without any uniformity or standardized principle reacted very flexibly to changing wartime and social conditions. It should also be noted that they continued to maintain student provision for fees and commodities necessary for life and study on campus. Amongst others, the most important influence that today's ordinary Chinese universities and colleges inherited from LA type colleges is the central theme of higher education, that is, the education of socialist ideology and politics. While the ordinary universities and colleges before the liberation had not accumulated experience in this field at all, LA type colleges were characterized by this kind of teaching.